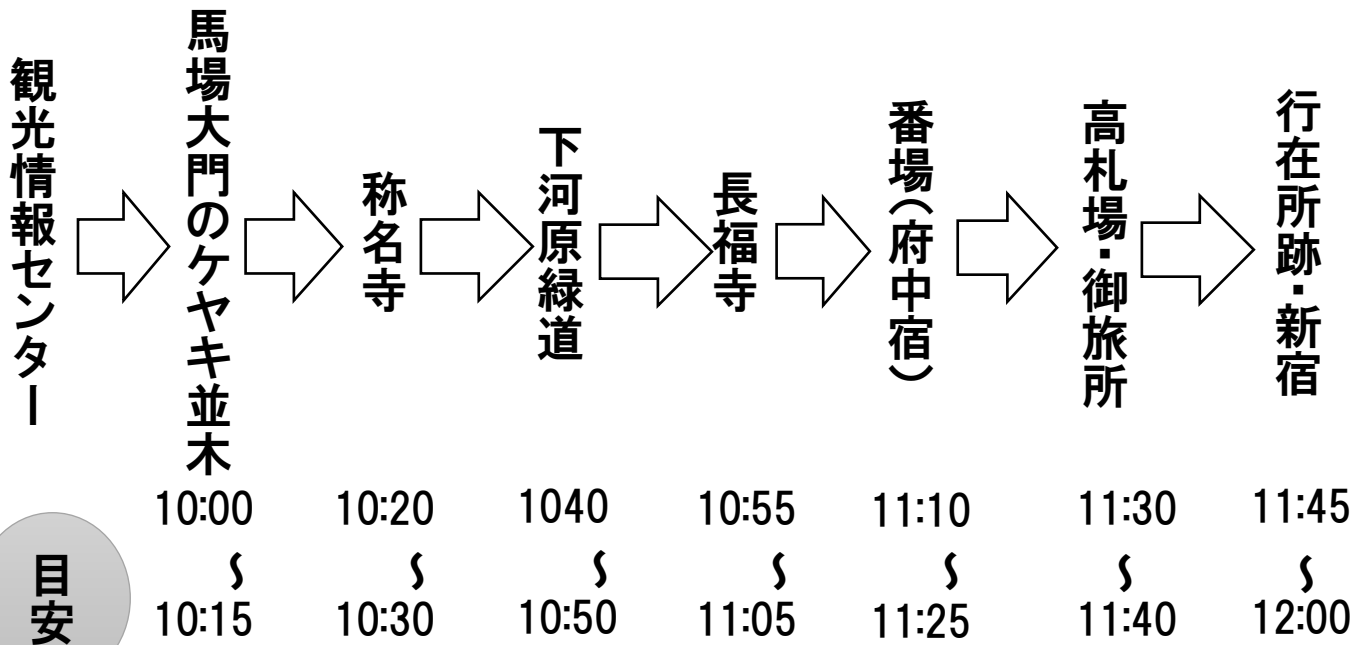


# 市内観光ミニツアーガイドマニュアル

## ケヤキ並木と甲州街道を歩く

### D 府中宿コース



#### 第一印象を大切に！

- ① 普段の体調管理で健康第一
- ② 笑顔で挨拶、笑顔で案内
- ③ 元気な声ではっきりと

#### 出発前の挨拶

- ① 自己紹介
- ② コースの説明
- ③ 案内中のお願いと注意事項
  - ・ 夏場の水分補給、冬場のトイレ
  - ・ 建物側の通行と自転車の注意

#### 緊急・事故時の対応

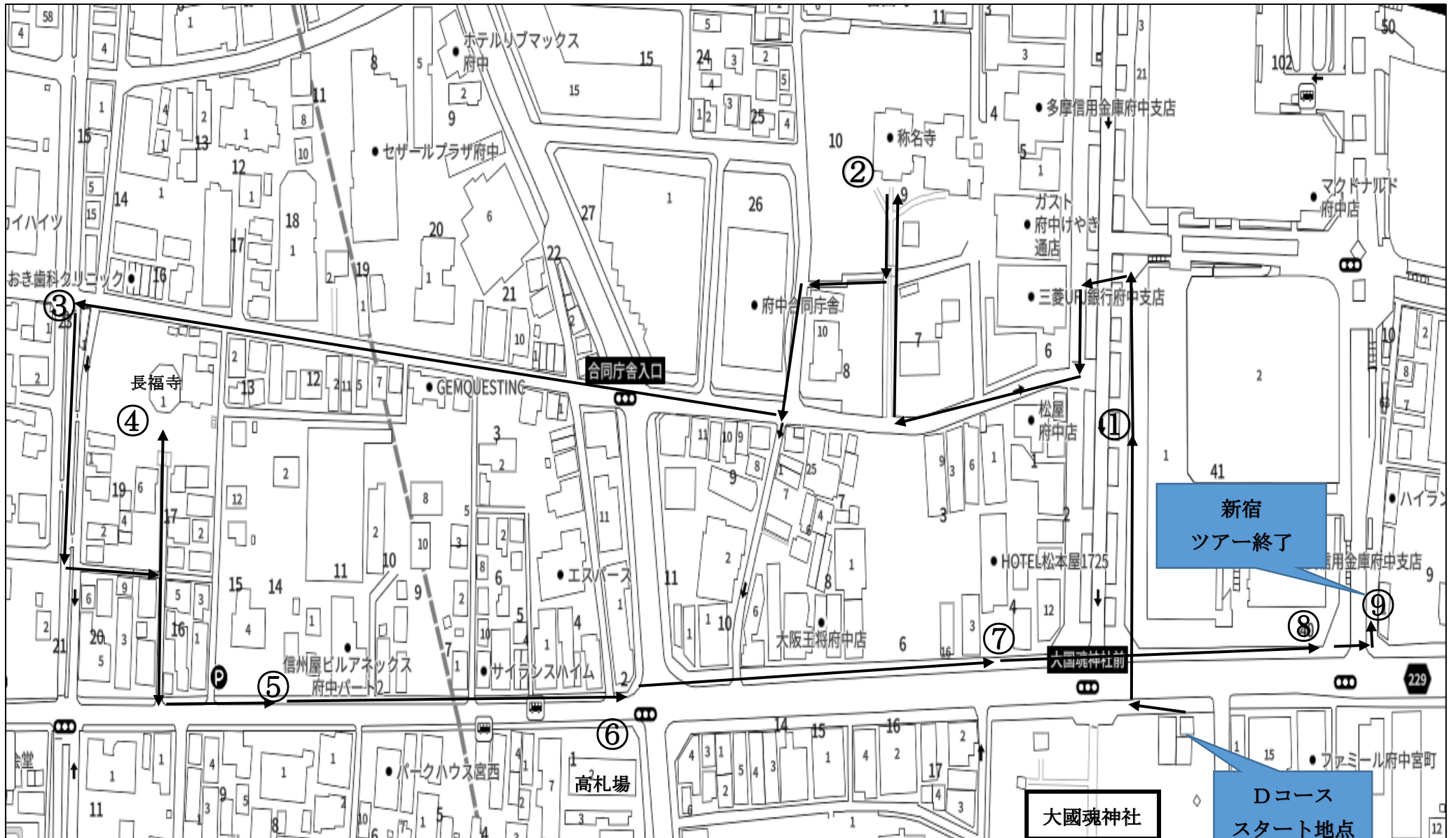
- ① 急病・怪我には、先ず応急処置を
- ② 病院、医師、ご家族への通報を
- ③ 第一報を観光情報センターへ

#### 解散方法について

- ① 解散後の個別の案内は行わない
- ② 参加者の帰りの交通手段を説明する
- ③ 解説チラシ、ミニツアーチラシを配布し、友人・知人へのミニツアー参加勧奨を依頼する
- ④ 観光情報センターに戻り「実施報告書」を提出する

## D ケヤキ並木と甲州街道を歩く 府中宿コース

NO	スポット	解説概略	備考
0	観光情報センター (10:00) 出発		トイレ
1	馬場大門のケヤキ並木 (10:00~10:15)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ケヤキ並木の起源 (頼義・義家と前九年の役)</li> <li>・馬場大門の云われ。(家康の馬場寄進) 天然記念物指定</li> </ul>	
2	称名寺 (10:20~10:30)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・縁起。 源経基.</li> <li>・時宗と宗紋、一遍上人</li> <li>・日限子育地藏、露光の碑、杉嶋屋の飯盛女の墓石</li> </ul>	
3	下河原緑道 (10:40~10:50)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東京砂利鉄道として開通</li> <li>・東京競馬場開設で旅客輸送開始</li> <li>・武蔵野線開通で廃線。</li> </ul>	
4	長福寺 (10:55~11:05)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・縁起 「国府道場」として発展</li> <li>・板碑の出土</li> </ul>	
5	番場宿 (11:10~ )	<ul style="list-style-type: none"> <li>・番場宿 (茂右衛門門宿)</li> <li>・甲州古道から甲州街道の整備で移転</li> </ul>	休憩 トイレ
	甲州街道と府中宿 ( ~11:25)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・五街道、甲州街道。</li> <li>・府中宿 (本町、番場、新宿)</li> </ul>	
6	高札場・御旅所 (11:30~11:40)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高札場。 川越街道・相州街道・甲州街道。</li> <li>・問屋場、本陣</li> <li>・御旅所 (くらやみ祭)</li> </ul>	
	四人部屋 松本旅館 万葉歌碑	<ul style="list-style-type: none"> <li>・四人部屋、献上瓜。</li> <li>・松本屋。</li> <li>・万葉歌碑、東京五輪2020自転車競技、ケヤキ並木保護更新PJ</li> </ul>	帰り道に 時間があ れば
8	行在所跡 (11:45~11:55)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・旧田中三四郎家「柏屋」、行在所。</li> <li>・郷土の森公園内に復元・移築された田中家住宅、島田薬局。</li> </ul>	
9	新宿 (11:55~12:00)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新宿 (采女宿)。</li> </ul>	



市内観光ミニツアー：  
ケヤキ並木と甲州街道を歩く  
D 府中宿コース

- ① 馬場大門のケヤキ並木 ② 称名寺 ③ 下河原緑道 ④ 長福寺 ⑤ 番場  
⑥ 高札場 ⑦ 松本旅館 ⑧ 行在所跡 ⑨ 新宿

## 馬場大門のケヤキ並木

馬場大門のケヤキ並木は、旧甲州街道から北に約 540mに及ぶ大國魂神社の参道であり、江戸時代には並木の北端(都立農業高校付近)に大國魂神社の木製の一之鳥居が建立されていた。2024年現在、ケヤキは118本。

ケヤキ並木の起源は源頼義・義家父子が奥州、安倍氏の反乱を鎮めるため、(前九年の役[1051-1062]、又は奥州12年合戦とも呼ばれ)その戦いに向かう途中、

大國魂神社に戦勝を祈願し、平定後の康平5年(1062)に勝利のお礼として神社に1,000本のケヤキの苗木を寄進したことが、始まりと云われている。この時東北地方ににらみを利かせる意味で社殿を北向きに変えたと言われている。

義家の父の頼義は3人の息子の元服をすべて異なる神社で行っており、その内の長男義家は京都の石清水八幡宮で元服をしたので八幡太郎と云われている。

その後、ケヤキ並木は徳川家康が関ヶ原合戦や大阪の陣の戦勝を祈願し、その勝利を感謝して並木の両側に馬場を献納し土手を築き、それと同時にケヤキの苗木を補植したとの伝がある。その時のケヤキ並木が現在のものと云われている。大正13年には国の天然記念物に指定された。天然記念物は、名木・巨樹が多い中、ケヤキ並木としては現在も国内唯一の天然記念物で保護されている。

フォーリスの前にあったご神木は大正5年の台風で樹幹が途中で折れ、大枝のみが1本残されて茂っていたが、その後、昭和26年のキティ台風で再度、大枝が折れて枯死してしまっただが、その幹回りは9m以上(幹の中はウロ状態)あり、樹齢700年は経っていると言われ、裁断され郷土の森博物館に展示されている(ウロは空洞化の意味)。現在はご神木跡地に八幡太郎義家の銅像が建立されている。

古来、武蔵国は馬の産地で、国府があった府中に多くの貢進馬が集められており、馬市も盛んであったと言われ、関東でも有数の重要な軍馬の供給地であった。

また、関ヶ原合戦や大阪の陣での軍馬の多くが、この府中の馬市から出たと言われている。

る。ちなみに、家康の乗った馬は「立黒」と言い、府中出身の馬だったと言われる。現在、立黒は日光の御馬塚に葬ってある塚だと言われている。立黒とは立野原から選出した馬であったからの名付けだったのであろう。国分寺村から府中町の間を立野原と言った。

### ● ケヤキ並木馬場寄進の碑

この碑は由緒ある馬場を長く後世に伝えるに建てられたもので、花崗岩の石に「従よりこれ一之鳥居迄五町余 左右慶長年中 御寄附之馬場」と刻まれている。

石碑がいつ誰によって建てられたかは不明だが、江戸時代後期の地誌「武蔵名勝図会」に図入りで紹介されており、そのころには有名であったことが知られている。

参考：安倍氏の反乱とは、安倍氏が朝廷に対し、年貢を納めることに抵抗したため、源頼義が朝廷の命を受けて反乱を平定した。

参考：大正天皇が皇太子の頃、多摩川の鮎漁に出掛けになった折、国分寺方面からこのケヤキ並木を通過した時、「ああ、これは良い青葉のトンネルだなあ」と褒めたと云われている。明治神宮や多摩御陵の参道はこのケヤキ並木にならったそうである。

### ● 高浜虚子の句碑

ケヤキ並木の中に高浜虚子の句碑くひがある。昭和5年8月27日ホトトギス派による第一回武蔵野探勝会が府中ケヤキ並木を題材に開催された。この日虚子が詠じた「秋風やけやきのかげに五六人」の碑が昭和53年4月に建立されている。高浜虚子は正岡子規かちょうふうえい門下高弟で「花鳥諷詠」の伝統を重んじる一方、子規の提唱した俳句革新による現代俳句の育成に尽力した。尚、この日の「披講」は安養寺で行われたが、当時の住職は「文堂」と号する俳人であった。その日の句箋はすべて是政の西蔵院(さいぞういん)に所蔵されている。武蔵野探勝会の最終回第100回目は、昭和14年1月8日鎌倉鶴ヶ丘八幡宮初詣であった。

## 称名寺

諸法山相承院称名寺と云う。時宗。もとは神奈川県相模原市当麻山無量光寺の末寺で江戸時代には朱印地として十三石八斗が安堵されていた。

称名寺の開山、開基共に不詳だが、安永元年(1772)6月の「当寺五十一世忍誉改之」と表紙にある過去帳には次のように書かれている。

無住起立天慶三庚子天(940)、有住起立寛元三乙巳天(1245) (この頃、称名寺と改称)当初は天台宗ではなかったかと推察される。

「新編武蔵風土記稿」によれば六孫王経基、即ち、源経基が平将門征伐の時に止宿した場所と記しているが、寺伝によれば源経基が武蔵介であった時の館跡と伝承されている。なお、新編武蔵風土記稿記載の正応2年(1289)の銘のある太鼓は現存していない。恐らく明治初年の火災で本堂と共に消失したものであろう。又、応永、嘉吉、文安、延文の年号が見られる板碑があまたありと記しているが、現存する板碑は一基のみで、しかも銘文は後に彫り加えられたものと推察され歴史的価値を失っている。

### 時宗の宗紋

「折敷三文字」でもっぱら「隅切り三」と呼んでいる。

開祖一遍が河野水軍河野通信の孫となることから河野通信以後が用いた家紋「折敷三文字」となっている。河野氏の家紋「折敷三文字」の由来は、鎌倉幕府の開府の時に鎌倉で行われた酒宴の席順が、源頼朝、北条時政、3番目が河野通信で、「三」と書かれた紙が折敷に置いてあった事から、席順を上から見た「折敷三文字」の紋を頼朝から貰ったと伝わっている。宗紋「隅切り三」が、この寺の扉や瓦に見られる。



### 日限子育地蔵尊(ひぎりしいくじぞうそん)

山門内右側に日限子育地蔵が安置され子育地蔵(こそだてじぞう)として近隣の信仰が厚い。五十一世廓蓮社忍誉上人万的大和尚が、念持仏として木造の地蔵(20cm)を二体作り、それを石造りの子育地蔵の台座に納めたと伝えられている。現在の地蔵堂は昭和40年に改築されたものである。毎月23日の縁日に地蔵堂を開帳し法要が行われる。

## 杉嶋屋の墓石

境内墓地には府中宿の飯盛旅籠の杉嶋屋が抱えていた薄幸な飯盛女と水子達の小さな墓石が並び憐れを誘う。

## 露光の碑

昭和 28 年 2 月 14 日現在の府中市新町の<sup>おがつ</sup>小勝多磨火工の火薬工場爆発炎上による 23 名の犠牲者を悼み、昭和 30 年 2 月「露光の碑」が建立されている。

## 一遍上人(智真=法諱) (1239~1289)

鎌倉時代の僧。時宗の開祖。延応元年(1239)2月15日伊予国河野水軍の一族、河野通広の子として四国松山の道後で誕生。宝治2年(1250)母の死に無常を感じ、父の勧めで出家する。法諱を随縁と称す。

建長2年(1250)浄土宗の僧、<sup>しょうたつ</sup>聖達の奨めで筑前国御笠郡原山の僧、華台の弟子となる。名を智真と改む。弘長3年(1263)父の死に帰国し還俗する。

別府七郎座衛門通尚と改名。その後再び出家し聖達の下に入る。

文永11年(1274)紀州熊野権現に<sup>さんろう</sup>参籠し、夢想の中に衆生の往生は「名号」により定まる。信不信、浄不浄の別なく人々に「南無阿弥陀仏」と記した賦算(念仏札を配る)をできるように口伝(熊野権現の神託)を受ける。時宗を開宗する。

名を一遍と改名。時宗は「南無阿弥陀仏」の六文字を唱えることにより今すぐ全宇宙が阿弥陀の浄土に変質するという教えである。人々は喜びのあまり踊りだす。「踊り念仏」は全国に広がっていく。一遍は又「一切を捨離すべし」という考えを体現した。「捨てよう」とか「捨てまい」とか思う心も捨ててみよう。

妻子も捨て、家も捨て、ただ一人全国を巡り歩き、教え伝えた。

「身を捨つる 捨つる心を 捨てつれば 思ひなき世に 墨染の袖」

「捨ててこそ みるべかりけれ 世の中を すつるも捨てぬ ならひありとは」何もかも思い切って捨ててみたら、実は本当に大切なものは捨てていなかったことがわかった。ここに身も心もさわやかな喜びが生まれてくる。

「捨ててこそ」の一遍の境地である。

一遍は、常々時衆(弟子たち)に向かい「南無阿弥陀仏の名号以外に心を囚われてはいけない」と教えていた。当然、「指導者も私だけで終わりだ。後継者などあるべきではない」と宣言していた。しかし一遍死後、時衆の多くは自分たちをまとめ指導してくれる者の出現を望んだ。彼らの要望により、一遍の最も古い弟子である真教が後継者として立った。この後継者を代々「他阿弥陀仏」と称して「遊行上人」と呼ばれた。時衆はいくつかに分派(十二派)して全国的に活動し鎌倉時代から室町時代にかけて全盛期を迎えるが、最大の派は真教の系統の一つである「遊行派」であった。時宗総本山は、藤澤<sup>とうたく</sup>山無量光院清浄光寺[遊行寺] (神奈川県藤沢市)

一遍は正応2年(1289)享年50歳、兵庫県の真光寺で遷化(高僧の死)した。

没後10年正安元年(1299)聖<sup>しょうかい</sup>戒=鎌倉時代の一遍の弟子により作り上げられた「一遍聖絵」全12巻の絵巻は国宝である。続いて「遊行上人縁起絵」全10巻が作られた。

典拠 山折哲雄編「名僧達の教え」朝日新聞社

## 下河原緑道(旧国鉄下河原線跡)

旧国鉄下河原線は、明治43年(1910)多摩川の砂利の採取運搬を目的に東京砂利鉄道として国分寺～下河原間7.1km開通。大正9年(1920)国有化され旧国鉄下河原線(貨物線)となる。府中市にとっては、市域初めての鉄道であった。

昭和8年(1933)東京競馬場が開設されると、東京競馬場前駅(当時、日本で一番長い駅名)まで支線が引かれ、翌年には競馬開催日に旅客輸送が開始され、戦時体制下の昭和19年(1944)には国分寺～東芝前間で東芝、日本製鋼所、日本小型飛行機等の通勤者専用電車を運転したこともある。昭和24年(1949)12月以降は常時運転となった。

昭和48年(1973)4月の武蔵野線(府中本町～新松戸)の開通により同年3月末旅客営業の廃止、昭和51年(1976)9月に貨物輸送の廃止となり、66年間の歴史の幕を閉じた。その後、府中市が跡地を買い上げ、歩行者自転車専用道として整備したのが下河原緑道3,460mである。

### 府中市域の鉄道

京王線は、明治43年(1910)資本金125万円で京王電気軌道として設立。

明治45年(1912)6月着工、大正5年(1916)10月新宿～府中間が全通した。

府中以西については、玉南電気鉄道が大正11年(1922)7月資本金150万円で設立着工され大正14年(1925)3月府中～八王子間が開通した。しかし、京王電気軌道のレール幅が東京市電への乗り入れを考慮した馬車軌道の(1,372mm)に対して、玉南電気鉄道のレール幅は標準狭軌(1,067mm)であった為、府中駅での乗換を必要とした。大正15年(1926)に京王電気鉄道が玉南電気鉄道を合併して、昭和2年に改軌工事を行い、昭和3年(1928)5月新宿～東八王子間の直通運転が可能となり、今日の京王線の原型が出来上がった。

西武多摩川線は、大正11年(1922)6月、多摩川の砂利運搬を本業とする多摩鉄道として武蔵境～是政間が全通した。多摩鉄道は、昭和2年(1927)4月西武鉄道に買収され、西武多摩川線として今日に至っている。

南武線は、大正9年(1920)1月多摩川の砂利採取運搬を目的に多摩川砂利鉄道として設立された。翌年3月南武鉄道と改称された。

当初の計画は大丸(現稲城市)から川崎間であった。川崎の浅野セメントは青梅地方産の石灰石の運搬に立川～川崎間を直通にしたいと云う思惑で同社の資金が入り、昭和4年(1929)12月立川～川崎間が全通開通した。

### 長福寺

古木山諏訪院長福寺。時宗遊行派。本山は神奈川県藤沢市の清浄光寺しょうじょうこうじ(遊行寺)。寛喜2年(1230)天台宗の寺院として開山。寺の過去帳によると、開山当時は天台宗で法道寺(勝福寺 等一定せず)と称していた。

鎌倉時代の後期正応年間(1288～1292)に遊行二祖真教上人が当地に巡錫じゅんしゃく(僧が各地を巡り歩いて教えを広める)により時宗に改宗され、以後700年に亘って時宗の法灯を受け継いでいる。

過去帳には「国府道場」と記載されている。(国府道場とは真教上人が念仏を広めるた

めに全国に拠点を作った念仏道場のこと。) 嘉元2年(1304)前後の頃、この場所は、武蔵総社六所宮や、足利尊氏ゆかりの高安寺に近く、当時府中は、武蔵国随一の政治都市、商業都市であったことから設置された可能性が強い。「国府道場」は、初めは天台宗の法道寺の中にあつたが都市民の供養や、板碑造立などの宗教活動を行いながら、やがて時宗寺院長福寺として発展したものと考えられる。

境内からは、嘉元4年(1306)を最古とする板碑が117点余も出土している。

また明治5年(1872)に府中小学校が開講される以前は、安養寺と同様に手習塾をしていた記録がある。(府中第一小学校100年誌より)

**長福寺の板碑**・・・郷土の森博物館に保管されている。

板碑とは、鎌倉時代から南北朝時代にかけて、埼玉県の秩父地方で産出する

りょくでいへんがん  
緑泥片岩で造られた供養塔のこと。(石造りの卒塔婆)

当時は、断片も含めると実に117点にも及ぶ板碑を蔵しており、これらはいずれも境内から出土したものと考えられている。このうち紀年名の判明するのは、嘉元4年(1306)から永正5年(1508)までの43点。全国的にも1か所からこれほど多量の板碑が出土することは珍しく、もちろん府中市域では最多の板碑群。供養の場として長期にわたって、当寺が利用されていたことがわかる。板碑群は数が多いばかりではなく、「○阿弥陀仏」や「○一房」といった法名が刻まれていることでも注目されている。ともに時宗系の法名で、一般には数は少ない。時宗寺院ならではの遺品である。

## 番場宿

番場宿は、元の名を茂右衛門宿という。これはこの土地が名主矢島茂右衛門によって開発されたことによる。番場宿と称するようになったのは寛永13年(1636)の事と云われている。幕末の地誌「新編武蔵風土記稿」には「家数103軒、甲州街道の左右に軒を連ね」とある。もともと番場宿はハケ沿いの甲州古道筋にあつたが、新街道の設定(慶安頃:1648~1652年)に伴って、本町をはさみ六所宮の西側に移転したもの。地名の起りかは不明、馬場の転訛とか、番所があつたからとの説がある。

矢島家は府中の旧家、先祖は、おうみのくに近江国、もりつな佐々木盛綱(近江源氏の一族、ひでよし佐々木秀義の三男)の末裔が上野国矢島村に移住し、地名の矢島を名乗ったのが始まりと伝えられており、南北朝の頃、矢島七郎なる者が新田義貞に仕えた。

あわのかみうじくに  
その子孫矢島左京亮師康は、後北条安房守氏邦(後北条氏政の弟)に従い、武蔵国鉢形城(埼玉県大里郡)に籠城したが天正18年(1590)3月落城して戦死した。

この矢島左京亮師康には4人の男子を残しており、次男、三男、四男は武蔵国府中に移住した。次男次郎左衛門師忠は旅籠屋「近江屋」を営み、後に名主、本陣を勤め、特に子孫に茂右衛門という富豪が出た。

茂右衛門氏から八代目の矢島源太郎氏の祖父にあたる矢島九兵衛は、分家であつたが、「信州屋」という、旅籠屋を営み、やはり名主や本陣を「近江屋」と交代で勤めたようである。「信州屋」は明治になり府中最初の郵便取扱所となった。この矢島家住宅は郷土の森博物館に移築再現されている。

もんた  
現在の御旅所は、元は矢島聞多氏の屋敷内にあつたものを、茂右衛門氏が現在地に移転したのだと云われている。

## ● 甲州街道(甲州道中)と府中宿

古来、政権を掌握した者は、支配権の及ぶ範囲の交通、運輸の円滑さに碎身した。徳川幕府も五街道(東海道、中山道、日光街道、奥州街道、甲州街道)を整備し、慶長9年(1604)五街道の起点を江戸日本橋として、宿場を整備し、一里塚を設けた。

甲州街道の整備時期についての確たる史料はないが慶長7年(1602)説が最も早い。甲州街道は慶長15年(1610)に下諏訪まで延伸され中山道に繋ぐことになる。江戸と甲府を結ぶ交通の要所と云えば、国府の府中と、後北条氏の主要拠点である八王子であった。甲府は、江戸時代初期においては、豊臣色の残る西国への徳川氏の前線拠点であった。八王子は大久保長安率いる十八代官や、千人同心が組織され、小仏関所も設けられるなど軍事拠点の機能も果たしていた。

北側の現甲州街道(国道20号)は昭和37年開通した。旧甲州街道が出来る前の古道は大國魂神社の随神門前の道で、ハケ下に降り多摩川を渡る道で甲州古道と呼んでいる。府中宿は、江戸日本橋から四宿目。距離およそ30km(七里半強)。

東海道、中山道に比べて交通量が少ないということは宿場の収入が少ないということで一宿を一村で経営するには無理が生じる。府中宿は本町、番場、新宿の三町で月の三分の一ずつ勤めていた。宿場設置の目的は、公用の輸送と宿泊を円滑に行い、荷物や人物を隣の宿場まで送り届けることで「宿継」と云う。府中宿は、上りは布田五宿から来た荷物を日野宿まで、下りは日野宿からの荷物を布田五宿まで運んだが、また「横継」と称して甲州街道に交差する相州道の関戸、川越街道の小川への、宿継が課せられた。この宿継の為には一定数の馬と人足が常備されるよう義務づけられた。甲州街道の宿場は、人足25人、馬25匹と定められた。文政5年(1822)に参勤交代の道順が固定されたが、甲州街道を使用したのは僅か信州の3藩(高遠、飯田、諏訪)のみであった。

府中宿の規模は、天保14年(1843)頃の調査に基づく「宿村大概帳」によれば

人口2762人、家数430軒、本陣1、脇本陣2、旅籠屋29軒、内飯盛旅籠屋8軒とある。飯盛旅籠とは遊女に等しい飯盛女を置く旅籠のことである。遊女屋営業は江戸吉原以外不許可が幕府の方針であったが、宿場助成策として享保3年(1718)江戸十里四方の宿場の宿屋一軒につき二名の飯盛女を置くことが許可された。飯盛旅籠の経営者は「宿益金」として宿場に年6両を差し出す約束をしているので宿場としても歓迎した。幕府の行政上はいずれも「村」であるが、道中奉行下では「町場」として扱われ、近村の人々にとっては「宿場」は、買い物場所、遊び場所である「巷」ともなっていた。

本町、番場は甲州街道開設以前、後北条氏時代の宿場として既に機能していたと思われる。本町は江戸時代以前から府中宿の中心であり大部分は、相州道に面した街並みで、番場は六所宮の西側の街並みで古くは「茂右衛門宿」と呼ばれていた。

尚、「道中」とは新井白石が、海の側を通らない道まで「海道」を当てるのはおかしいし、音の同じ「街道」もやめたほうが良いと主張した為享保元年(1716)から幕府の正式文書で表記されることになった。甲州道中と表記された。

## ● 問屋場といやば

問屋場は宿場でもっとも重要な施設で大きく二つの仕事がある。

一つは人馬の継立業務で、幕府の公用旅行者や大名などが、その宿場を利用する際に、必要な馬や人足を用意して置き、彼らの荷物を次の宿場まで、運ぶこと。二つ目は幕府公用の書状や品物を次の宿場に届ける飛脚業務ひきやく つぎひきやくで、継飛脚と言う。

これらの業務を円滑に運営するために、問屋場には宿場の最高責任者である問屋といや(名主が宿役人として差配するのが一般的で本陣を経営することも多かった)、問屋の補佐役としよりである年寄、事務担当の帳付ちょうづけが詰めていた。又、その下に、人馬指じんばさしとか馬指うまさしと言った、人足や馬を指図する役職を置いていた宿場もあった。

参勤交代等で、人足等が足りなくなると近隣の村から助けてもらう「助郷」すけごうという制度もあった。

問屋場は一つの宿場に1ヶ所だけとは限らず、一つの宿場に複数の問屋場があった宿場もあり、このような宿場では交代で業務を担当していた。

府中宿では、この問屋場が3ヶ所あり、三町が交代で伝馬継立の業務を負担した。

三町の伝馬役の勤め方は、月に11日が本町、残りを番場宿と新宿宿で勤め、府中宿は甲州街道を、西は日野宿まで(2里)東は布田五宿(調布)まで伝馬の継立を行ったが、この他甲州街道と交差する脇往還わきおうかんの横継よこつぎの伝馬役も務めなければならなかった。

北は川越街道を小川村(小平)まで、南は相州街道の多摩川を渡って関戸村(多摩市)まで継送りしたのである。

こうして伝馬役は宿内の街道に面して、これを負担する家は伝馬屋敷と言われ、府中宿では本町が37軒半、番場宿と新宿が34軒に定められており、合わせて105軒半の屋敷持ちの者が負担していた。しかし、年々増加して行く、伝馬役の負担も年を追って過重なものとなっていた。

**参考：**伝馬役とは、戦国時代から江戸時代、街道の宿駅で公的な貨物輸送を行うなど

の課役かやく(割りあてられた仕事)。助郷すけごうとは、江戸時代に徳川幕府が諸街道の宿場の保護、人足や馬の補充を目的として夫役ぶやく(労働課役のこと)。

伝馬役は無賃であって、公用とは徳川幕府の用であり、宿から宿へ荷物を継送る伝馬として提供する馬と人足は無料奉仕だった。その代り、宿の地代は免除されていた。よっ

て、宿の収入は、諸大名の参勤交代や商人荷物、庶民の寺社詣じしゃもうなどによる往来だった。

帳付ちょうづけと馬指うまさしは、幕府の威光を笠に横暴非道の武家や雲助などと呼ばれる無宿風体の人足を相手にしなければならなかった。

## 高札場

江戸時代、幕府からご法度、掟書などを一般庶民に通達する方法として、板に書き示して街道沿いの宿場や橋のもと、村の名主宅前など、人目に付きやすい場所に揚げたものを「高札」といい、これを揚げた場所を「高札場」と言った。現在の府中街道にあたる道路は甲州街道のところで「かぎ型」に曲がっており、江戸時代甲州街道を北上する川越街道、南下する相州街道が交差する交通の要であった。「札の辻」や「鍵屋の辻」とも言われた。現在でもこの名は残っている。

幕府の庶民に対する基本政策とともに、次の宿場までの距離や駄賃だちんせんの額が、板に書いたお触れとして掲げられていた。キリシタン禁止、徒党の禁止等など、これらを板に墨書きして揚げさせた場所である。

## 御旅所

六所宮の大祭で重要な神事の場所となる御旅所もこの街道が交差するところにあり、高札場隣に所在する。

御旅所は神社の祭礼に置いて神「一般的には神体を乗せた神輿」が巡幸の途中で休憩又は宿泊する場所のことを云う。祭礼（くらやみ祭り）の時に神輿（シヨ＝みこし）が本宮から渡御（トギョ）して仮に留まる所である。

現在、くらやみ祭では5月5日に神輿渡御（おいで）で、お神輿が本殿から御旅所渡り、一晩泊まって翌朝5月6日の朝に神輿還御（おかえり）で、町内を回って大國魂神社の本殿に戻り、鎮座祭でくらやみ祭が終了する。

\*神輿：神幸（シコウ）の際、神体又は御霊代（ミタマシロ）が乗るとされる輿（コシ）

### ● 四人部屋

「四人部屋」は、旧甲州街道沿い（番場宿神戸）の老舗和菓子屋「亀田屋」の西隣にかつてあった旅籠である。その主人野村六郎右衛門（本名維民）は文人でもあり「瓜州」と号した。瓜州とは勿論、府中特産御前栽瓜に因んだものである。

当時の文人墨客との交友もあり、特に太田蜀山人とは親交が深く、片町高安寺の瓜州の墓石には墓誌と撰文を残している。漢学者野村延陵、国学者服部伸英について学び、自らも漢詩を嗜み著作『担担草』を残している。

「四人部屋」の屋号の由来は、親子四人連れの坂東巡礼が来宿した折、四人の内一人を養子にしたことからと云う。明治になり旅籠屋は廃業したようである。

## 府中献上瓜

徳川家康は、関東入国後、各地に「御殿」を造営した。府中御殿の場合には、休息、宿泊所の他、特に次の「課役」を行わせる目的があった。

- 1) 多摩川御川狩りによる鮎の上納
- 2) 府中馬市での将軍用の馬の買い上げ
- 3) 御前栽での瓜の生産

「課役」とはこれらに伴う人足役などであり、中でも江戸時代を通じて周辺の村々に影響が大きかったのは「御前栽瓜」の生産であった。

戦国時代、美濃国真桑村（現岐阜県本巣市=町村合併で変更）で産する真桑瓜がその代名詞となる。織田信長が朝廷に献じた記録もある（御湯殿上日記）

徳川将軍へも慶長8年(1603)以来元禄4年(1691)に献上止めになるまで真桑村から献上された記録がある。これ以後も献上瓜は継続し、「武州府中御前裁で作付け」と記録されている(真正町{現本巢市}教育委員会 真桑瓜史談)真桑村の瓜の献上は、宝永6年(1709)に再開され享保7年(1722)再度中止となった後にも、府中作付の為の瓜種は毎年一升五合送られた。府中での瓜の栽培開始は「権現様入国以来」まで遡るとされているが宝暦7年(1757)の代官への返答書では寛永年間(1624~44)とある。栽培当初は、真桑村から府中に瓜作り人が出向いて栽培していたが何時の頃か、府中に住み着いたと伝わる。瓜田は、府中三町及び是政村の四名主が提供し、年貢高からは除外された。その後、瓜作人は、府中の者3人に交代する。瓜田面積も八反から二反に減じられている。この頃の献上数は江戸城本丸に1,000ケ、西の丸に500ケと記録されている。当初は、府中御殿への献上だった可能性が高いが、正保3年(1646)御殿焼失後は江戸城納入に移行したものであろう。府中瓜には特別の用途が見られる。献上に当たり代官の指示の元に御膳所に納められ、その届が老中まで上げられている。(大岡忠助日記 元文2年7月7日条)献上数も明和年間(1764~71)で5,500ケ前後。文政3年(1820)の記録では6,915ケと増加している。この大量の瓜は、江戸中期以降、城内だけで消費されたものではない。将軍と大名との間で、贈答品つまり、下賜~拝領と云う形で儀礼化し「御恩と奉公」の中に位置づけされていた。権威と結びついた名産品を手に入れる喜びは、大名クラスのみならず下級役人にも広まったと見える。(街道の日本史巻18馬場治子 府中瓜)

### ● ホテル松本屋

松本屋は経営者の交代はあるが、江戸時代中期の享保10年(1725)創業と云われる老舗旅館である。天保12年(1841)調査による「府中三町商売渡世向書上帳」によれば松本屋甚五左衛門の経営により茶屋旅籠屋、昼は饅頭蕎麦、一膳飯商とある。

近年ビジネスホテル松本として模様替えし、往時を偲ぶことはできないが創業以来現在まで営業している唯一の旅館である。(建物や看板に[1725]の文字がある。)

府中六所宮の宮司、猿渡盛厚氏の著書「武蔵府中物語」には天保14年(1843)

3月21日、老中首座水野越前守忠邦一行が遠乗りと称して府中宿を訪れ、六所宮に参詣した記載がある。一行は、八ツ時(午後2時)頃まで宿内の旅籠に分散し休憩したと記している。その際、水野忠邦は新宿の柏屋、土井大炊頭は中屋、側用人堀大和守は神戸の松本屋に休んだとしている。恐らくこの松本屋であろう。その他、一行が休んだ山城屋、吉野屋、東屋、百足屋、大嶋屋、杉嶋屋と旅籠の名前が記載されている。

天然理心流三代目の近藤周助(四代目は近藤勇)は、万延元年(1860)9月30日六所宮に流派の存在をアピールの為に献額した。献額の神事には、府中の名主や、天然理心流の門人82名も参加したと云う。献額は一つの興業であり、寄せられた祝儀は実に225両に上ったと云う。その夜、奉額の祝宴が開かれたのが松本屋であった。

また、翌年の文久元年の四代目近藤勇の襲名披露と野試合後の祝宴で大騒ぎをして顰蹙をかったのは、新宿の松本楼である。

## ● 万葉歌碑

大國魂神社大鳥居前、旧甲州街道に面して、万葉歌碑が平成 11 年に建立されている。

「武蔵野の草は諸向き、かもかくも君がまにまに吾は寄りにしを」 訳せば、「武蔵野の草はあちこちに靡きます、とにかくも私は貴方のお気に召すように、ひたすら心を寄せていたのに」作者未詳。一言で云えば、男の浮気心に対しての女の一途な気持ちを表した歌である。

府中は、武蔵国の国府として文化・経済の中心であった。防人として召集を受けると国府に集まり、府中から遠く大宰府に向かった。その時の歌も残されている。

## 武蔵国東歌

全 20 巻 4,500 首余からなる万葉集の中の二つの歌の万葉歌碑が市内にある。

万葉集巻 20 歌番号 4417 郷土の森博物館敷地内

万葉集巻 14 歌番号 3377 けやき並木旧甲州街道より

東歌は古代律令国家による支配体制が及ぶ中で、東国の国府、郡家（グウケ）などの地方官衙を通じて流入した先進文化の形態として表現され、都に運ばれ収録された歌群ではないだろうか。決して東国農民の素朴な民謡ではないであろう。東歌発生の「場」には国府が関係しているのではないか。東歌発生の景観を国府からの視点で捉えてみる。国府には中央からの国司が赴任し、律令国家の地域支配の要となる施設があった。国司の着任、離任にあたり、様々な儀式や宴が実施された。都に徴発される防人、衛士、仕丁等は、国府に集結し、旅立つ。東歌には、旅、生産活動に関する歌が多いのは国府の周辺で歌が生まれたからではなかろうか。東歌が題材とする景観が国府を中心とする国家の交通体系に拠っていることも同じ理由である。日々、生業に勤しみ、恋愛に情熱を持ちつつも、徴用に苦しむ東国農民の思いと、都との間を往反する国司らの歌が国府周辺で出会い、国庁官人や遊女らの介在があって短歌形式に整えられ国府の宴などで披露され、伝承されたものが採録され、中央に運ばれ、東歌となったのではなかろうか。典拠 府中市郷土の森博物館 紀要 小野一之「武蔵国東歌について」

## ● 東京五輪 2020 自転車ロードレース記念表示

2021 年に開催した東京オリンピック 2020 において、自転車のロードレース競技が府中の武蔵野の森公園をスタートして、ケヤキ並木、大國魂神社の境内をプレランで走行した。これを記念してポストが設置されている。

## ● ケヤキ並木保護更新プロジェクト

府中市と都立農業高校などが協働で取り組んでいる「ケヤキ並木保護更新プロジェクト」で、府中のシンボルであるケヤキ並木を未来に継承するため、ケヤキの保存更新を図っている。農業高校が主体で、ケヤキの古木から種子を採取しケヤキを育成して、補植を行っている。

## 行在所跡

行在所（アンザイショ）という言葉は今ではあまり使われることはないが、仮の御殿という意味で、天皇が宿泊した建物を指す。郷土の森博物館内に復元された旧田中三四郎家住宅の門前に「明治天皇府中行在所」と刻まれた石柱が立っている。これは昭和 8 年 11 月に旧田中家住宅が明治天皇の聖蹟として、国の文化財に指定されたことを受け、同 10 年に建立されたものである。同 15 年には、紀元 2600 年記念事業として建物を修

理することが決定され、翌16年3月には府中町が建物を買い取り町有財産とした。しかし、第二次世界大戦後の昭和23年6月、全国明治天皇聖蹟は文化財を解除され文化財ではなくなり、旧田中家住宅は、昭和36年取り壊され、御座所を残すのみとなっていたが、平成元年(1989)御座所が郷土の森博物館に移築され屋敷全体が復元された。明治天皇は在位45年間に6回の巡幸と100回の行幸を行っているが、明治13年(1880)初めて府中を訪れている。府中への行幸は明治14年から17年にかけて6回行われている。行幸の目的は兎狩りと鮎漁の天覧であった。これら行幸の際の行在所は旧田中三四郎家であった。

田中三四郎家が車返村(現白糸台)から新宿に移住したのは安永、天明期(1770~80)のこと。この時代では検地帳に先祖の名前が記載されていることがステータスの一つであり、これは幕府から耕作の権利を認められたことを意味する。

従って、田中三四郎家は新宿では「新出百姓」でのスタートであった。しかし、移住後、半世紀は新宿の村役人を勤め、屋号を『柏屋』といい、酒や荒物、反物、また旅籠屋の商売を営み、嘉永元年(1848)には信州飯田藩の参勤交代の府中宿本陣を勤めている。このことから、経済的な豊かさを背景に三四郎家の村内、宿内における地位が高まったことがわかる。これは当時の府中での三四郎家の財力や立場が最も高かったことを意味する。その後の発掘調査で検出された井戸跡の石組みの井筒は、全国でも類例がないもので財力の大きさを伺うことができる。

## 新宿

新宿は、甲州街道が現在の位置に移動した後の寛永14年(1637)から正保年間(1644~1648)にかけて成立したと考えられている。三町の中では最も新しい町場であり、故に新宿と称された。六所宮を境に東側に広がっている。古くは「采女宿」と呼ばれており、後に依田伊織が出た本町の五十嵐家の祖先五十嵐采女がその開設に尽力したと伝えられている。新宿は、19世紀前半の史料によると、家数100軒、名主1軒、年寄百姓5軒、本百姓76軒、寺院3軒他となっている。その屋敷地は、街道に間口を面して、直角に奥行の長い短冊形地割を形成していた。新宿宮ノ前の発掘調査から大量に出土した鉢、皿に釘書きされた屋号が確認される。圧倒的に多いのが旅籠屋の「中屋」の什器である。中屋は中屋直右衛門が府中宿で一番繁華な新宿宮ノ前で経営していた旅籠屋の名である。明治13年頃まで貸座敷を営んでいた「東屋」又、新宿宮ノ前の東隣では19世紀前半まで飯盛旅籠を営んでいた「杉嶋屋」の釘書きのある磁器皿が出土している。六所宮拝殿両脇の天水桶もこの「杉嶋屋」が奉納したもので、天保3年(1832)の銘がある。又、称名寺の境内に墓所があり、薄幸な抱え女郎達を懇ろに埋葬した杉嶋屋と推定する。又、府中駅南口再開発事業に伴う発掘調査では旧田中三四郎家の井戸跡1基、土蔵跡4棟が明治期初頭の絵図面と同位置で発掘されたのは、府中で初めてのことであった。この旧田中三四郎家は屋号「柏屋」で近世末期府中宿の代表的な商家の一つで明治天皇多摩川行幸の際に「行在所」と呼ばれた。この田中家住宅は、郷土の森博物館に、行在所の座敷、土蔵、井戸などが移築再建されている。また、田中家住宅の向かい側にあった、「島田薬局」も移築再建されており、往時の様子が偲ばれる。